

## 市民科学談話会

## 放射線リスク言説を検討する

## ～霜田求さんを囲んで～

\*\*\*\*\*

2015年8月の市民科学講座（[「霜田求さんとともに考える 遺伝子検査ってどこが問題なんですか？」](#)）へのご登壇に際して、霜田求氏（京都女子大学現代社会学部教授）から送っていただいた論文は、福島原発事故後に噴出した放射線健康リスクをめぐる様々な言説をうまく類型化し、批判的に検討した出色の論文でした。後に[『生命と科学技術の倫理学 デジタル時代の身体・脳・心・社会』](#)（丸善 2016年1月）の中の1篇として収めることになったこの論文を市民研・低線量被曝研究会の仲間を読み、霜田氏を囲んでの談話会に臨むことになりました。ここに掲げるのは、その8月8日に実施された談話会での、議論の記録です。読者の皆さんには、この本の霜田論文を読まれた上で、談話会記録を読んでいただければと思います。

当日は、霜田求氏による「リスクをめぐる言説と対立構図—その批判的検討」、上田昌文による「放射線健康影響に関する専門家フォーラム」の実践から」、柿原泰による「放射線健康影響問題を歴史的に捉え直す」の発表を、実技応答を交えながら行いました。ここでは霜田氏の発表を受けてのやりとりのみを掲載し、その後の部分は割愛させていただきます。機会を改めて報告できればと思います。

出席者：霜田求（話題提供者）、柿原泰、吉田由布子、瀬川嘉之、上田昌文（以上、低線量被曝研究会）、西田進（市民研会員） ほか参加者1名

\*\*\*\*\*

（霜田）私はもともと哲学・倫理が専門でヘーゲルやハーバーマスなどドイツ近現代の社会哲学・倫理学や、生命倫理・環境倫理などの応用倫理なんかをやってきました。1998年に熊本学園大学に着任し3年間いたのですが、そのときにちょうど原田正純さんがその大学に移ってこられて水俣学プロジェクトが立ち上がり、私も参加することになりました。水俣現地に行ったり、原田さんと一緒に患者さんにお会いしたりして、強烈な印象を受けながら自分に何ができるのだろうかといういろいろ考えました。その当時、ダイオキシンや環境ホルモン問題が非常に盛んだったので、そこで語られるリスクについて考えようと思い、私のような文系の人間でも対応できることがあるのではないかと、検討し始めたわけです。

そのときにリスク論といえば中西準子さんでしたが、彼女のリスク論を読んでいると何かおかしいと

感じ、そのことを言葉にしようといういろいろ考えました。ダイオキシン・環境ホルモン問題と同じ構造が水俣にもあったのだということが資料を読んでいてわかったのです。1956 年に水俣病公式発見があり、その後 59 年にチッソ水俣工場の排水に含まれるメチル水銀が原因であると熊本大学が発表したのですが、因果関係が証明されない以上排水は止められない、ということになりました。そこで、リスクをめぐる議論、とりわけ因果関係の特定、疫学的あるいは病理学的なレベルでの関係について、一般の人も理解できるような形で論点を整理する作業を進めました。それを「水俣病事件の教訓と環境リスク論」という論文にまとめました（[熊本学園大学『社会関係研究』第 9 巻第 1 号（2002 年 11 月）](#)）。『水俣学研究序説』（藤原書店、2004）という本にも収録されています。

そこで考えていたことが福島にも当てはまるのではないかと、二度あることは三度ある、これは何とかしないといけないと思ったわけです。つまり水俣やダイオキシン・環境ホルモンの教訓は何も活かされていない。同じことが繰り返され、かつそれが堂々とまかり通ってしまう。これは重大な問題であり、明確にする必要がある。そこで福島原発事故に関する膨大な資料の一部を読み解く作業を約 1 年ぐらいかけて行い、まとめました。科学技術の倫理をテーマとする科研グループで論文集を丸善から出版することになり、そこに収録される予定です。<sup>注</sup>

この論文の内容に入る前に、最近の関連記事をいくつか紹介します。まず、朝日新聞 7 月 24 日の記事ですが、これは「福島の甲状腺検査で、事故当時 18 歳以下だった計 103 人が甲状腺がんと診断されました。事故の影響は考えにくいとのことですが、なぜそう言えるのでしょうか。」という一般人の質問に対して記者が答えるという体裁のものでした。

福島では現時点で 18 歳未満の 103 人が甲状腺がんと診断されているが、原発事故の影響は考えにくい、というのが日本政府や福島の公式見解です。どうしてそんなことがいえるのか、という非常に素朴かつ重要な質問に対して、朝日の記者は行政の代弁をするわけです。従来 100 万人に 1 人か 2 人といわれていたが、きっちり調べると約 38 万 5 千人のうち 103 人が見つかった、これはスクリーニング効果であり、事故で増加したとはいえない。また、103 人のうち 100 人は進行が遅い乳頭がん、乳頭がんになっても生涯気づかないケースが多く、深刻ではない。さらに、被曝線量はほとんどの場合 100mSv 以下であり、それくらいであればがんになるという証拠はない。乳幼児も被曝しているけれど乳幼児には一例も出ていないし、事故当時 5 歳以下の子供からも見つからない。こうした「たいしたことはない」という情報操作・印象操作が行われます。

次の記事は甲状腺がんの影響についての福島県立医大教授の鈴木真一氏に関する記事（日経新聞 2014/8/28）ですが、スクリーニング効果だったらなぜ手術したのか、過剰診療ではないかという批判が出て、鈴木氏は手術は必要だったと抗弁しました。一方でスクリーニング効果だと言いながら、手術をしたことは正当であったと言う。甲状腺がんは直ちに命にかかわることではないが、転移すると重大な結果につながる可能性があるからです。2014 年の夏までに 54 人の手術をしたが、そのうち 45 人はリンパ節転移が見られたというのですが、これは放射線被曝による影響であるというのが通説です。原発事故の影響ではないと言いながら、実質的にその影響を認めていることになります。

<sup>注</sup> 森下直貴編『生命と科学技術の倫理学』丸善、2016 年

次に紹介する記事は、東京新聞7月2日のもので、茨城県の小中学生の心臓検診で心電図に異常があることが見つかったというものです。チェルノブイリでも、がんだけでなく心臓や他の健康被害報告はたくさんありますが、そうしたこともほとんど考慮されません。『美味しんぼ』鼻血問題も典型的な例ですが、福島復興の妨害をするなというバッシングも加わり、国家的詐欺ともいえる情報操作が行われました。健康被害を受けた人たちは声を上げることもできず、もちろん金銭的補償も受けられないのです。

以上のような、意図的あるいは無知による情報操作に対して私たちはどのように対応すればいいのでしょうか。膨大な情報を読み解く力（リテラシー）が求められるのは言うまでもないのですが、やはり個人レベルでは限界があるので、協力し合いながらデータベースを作成して情報操作に対抗していくことが必要ではないかと思います。

とりあえず前置きなのですが、今お話ししたことについて何かご意見やコメントがありましたらお願いします。

（吉田）あの、最近というか厚労省の研究のひとつで、（国立がんセンターの）津金さんと（岡山大の）津金さんとかが一緒にやったものが公表されていますけれど、そこでも結局、過剰診断か放射線の被曝によるどっちかしか考えられないけれども、でも被曝ではないんじゃないかという感じのまとめです。県民健康調査の甲状腺評価部会の方でも、やっぱりどう考えてもスクリーニング効果だけでは説明できない。数十倍になっていると。それ自体は認めざるを得ないというのが今できて、ただしまだ因果関係までは言っていないけれども、まったく関係がないと今まで言っていたのが、ちょっと自信がなくなってきたかなというみたいな感じではあります。

（霜田）福島県は、7月に1000人くらい出る可能性があるということで対応が必要となるといった発表をしました。やはりそれぐらいの可能性があるとすることを認めているようです。

（吉田）19歳以降の甲状腺がんでの医療費の問題で発表したときですよ。

（霜田）このあたりの評価はどんどん変わっていくでしょう。おそらく今後新しいデータが出てくると、スクリーニング効果というのは消えているかもしれませんが、かといって因果関係を認めるということにはならないでしょう。しかし実質的に原発の事故の影響であることは否定できないということになるかもしれません。

（吉田）今月あるのですかね検討委員会。3ヶ月に1回だと、今月でしょうけど。今月だと、もう発表されないかね。期日が来月になっちゃう。

（柿原）最初に紹介された朝日の記事で3巡目とありますが、今は2巡目の途中ですから、間違いでは？

（霜田）ご指摘の通りこれは間違いですが、元々の記事がそうになっていました。

（瀬川）もとがそうだとすると、新聞記事がそうになっているということで、まずいのではないかな。

（霜田）これはウェブ記事のコピーなので、紙面の記事では訂正されているかもしれません。

(瀬川) それは良いとして、朝日の記事の問題というか、多くの場合、新聞は両論併記をします。両論併記が良いとも思わないけれど、この記事は両論の片っぽしか書いていません。それは読者の質問に答える形だから、許されるとしても、やはり一つの記事として一方的だと思います。でも逆に言えば、東京新聞の記事について、例えば心臓のものについてほかの可能性の事を書かないのも両論併記ではないんじゃないかという言い方もありえと。甲状腺の問題の場合、放射線の影響と過剰診断の可能性というのは、スクリーニング効果の可能性もまったくないこともないだろうということ、それは一般的にああいう検査をすればあるので、現実には両方の可能性がある、それはわからないとも言えるし、あるとも言えるのですが。それと、両論併記的なものというのは、今回は何か、非常に偏っている例として、出されたのですか。

(霜田) 朝日の記者は、政府の公式見解をスタンダードとして受け取っているので、両論という認識がない。公式見解がおかしいかもしれないという発想がないので、調べようもしないのではないのでしょうか。

(瀬川) 両論の両があるということさえも認識がないのか。

(霜田) もしあればネットで調べようとすると思いますが、ないのでそもそも調べようもしない。

(柿原) 最近の記事ですよ。これが3年前ぐらいだとそうした論調がかなり多かったのでわからなくもないのですけれど、この時点においてもまだ、というのは…。

(瀬川) 新しく移ってきた記者かな

(霜田) 東京新聞の記事は、市民運動団体の発表を報道したものであり、その反対の意見を載せる必要はないと思います。市民運動の人たちがこういうことをしているというだけで、それが正しいということを追認しているわけではない。これは報道すること自体に意味がある。多くの人知らないことを記事にするという点で、東京新聞は比較的がんばっていると思います。

(瀬川) ただ、市や県がどういうふうに言っているのだろうかというのは気にはなります。

(霜田) では、事前配布した論文の内容について、ポイントをかいつまんでお話して、皆さんのご批判を受けたいと思います。

「リスク論」とは何でしょうか。それはある種の業界を形作っています。関連学会、産業界、政財界、マスコミといった利権集団がさまざまな「リスク」について特定の方向を決めているのではないかと思います。

定量化困難性や不確定性はリスク評価にとっては避けられないことですが、定量化あるいは数値化できる部分だけを見ても適切な判断はできない。できないものをどのように取り扱うかがむずかしいのです。リスクについて欧米でもずっと議論されてきていますが、とくに新しいテクノロジーを導入するときはそのリスクをどう見積もるのか、そのためのコストをどのくらいかけるのか、コストをかけすぎるとベネフィットが失われるから多少のリスクは受け入れるべきだ、というのがよくある議論です。そう

したことも含めて理論的な整理を始めるのところで行いました。

論文の最後では私自身の立場を明確にしていますが、水俣、環境ホルモン・ダイオキシン、そして福島と3度も同じことが繰り返されるということに対して、その構造的問題に切り込むことが不可欠であることを強調しました。

リスク論の論法を分類する際にはいろいろと苦労しましたが、いくつかのパターンをミックスして整理しました。

1つめの論法である「グレーはシロ」について補足すると、はっきりわからないことは問題にしないという言説がしばしば見られるのですが、シロという断定はされません。ここで引用している山下俊一氏も、世間一般の人相手には断定的に「問題ない」というのですが、学術的には断定的表現は使いません。「影響があるとはいえない」というかたちでごまかす。因果関係があるとはいえない、影響があるとはいえない、だから心配する必要はない。福島に戻りましょう、とつながっていく。しかし根拠がないのにシロというのはおかしいのであって、グレーはグレーでしかないのです。

2番目の論法は「相対化による矮小化」です。これは中川恵一氏が頻繁に用いるのですが、「福島原発事故による放射線被曝は〇〇と比べたらいしたことはない」といった言説です。これは、不安に思っている人たちにとってかなり効果を持つ論法です。「専門家が言っているのだから大丈夫なのだろう」ということになります。例えば、被曝であればレントゲン、航空機、ラジウム温泉などを、がんのリスクであれば喫煙や野菜不足、肥満や運動不足などを持ち出してきて、それらと比べてもたいしたことはない、といった印象操作を行う。また自動車事故の話を持ってくる。「福島で誰が死にましたか」「交通事故で毎日どれだけ死んでいるのですか」などと言われたら「ああそうか」と思う人が少なくない。これらに反論するのはそんなに簡単ではありません。

5番目の論法とも重なりますが、「一般人はリスクに対して過剰に反応しすぎず」という論法も付け加わります。人間は自分にとって都合の悪いことは見ないようにする、自分の中で客観的データをいわば捻じ曲げてしまうという傾向がある、だからリスクは科学的に冷静に見ないといけません、というわけです。「何だこんなものか」というので安心する、そういう心理的效果を狙っていると思われます。

3つ目の論法はリスクとベネフィットの関係です。何らかのベネフィットがある以上、一定のリスクはやむをえない、リスクはゼロではないのだということを理解すべきだ、というわけです。あるリスクを減らすことで別のリスクを生み出してしまうという、トレードオフ論にも言及しました。リスクを抑えるためにやることはあるが、それをやりすぎると別のリスクが頭をもたげてくる、そのことを考えないといけない。これ間違いではないですが、だからといってそのリスクを減らすことを否定することにはならない。

4つめはリスクとコストの関係です。リスクを減らすためにはお金がかかるということです。原発を使わないとコストが増えて電気料金は上がる、という話です。これは明らかにいろいろなカラクリを駆使した詐術なのですが、それを暴くのは容易ではありません。

5番目の論法はゼロリスク、ストレス、不安です。「一般大衆は多大な恩恵を享受していることを忘れてゼロリスク要求をする」といった言説です。そして、健康被害を引き起こしているという科学的根拠がないにもかかわらず異変が生じるのは、心理的な問題すなわち生活環境の激変などによるストレスや不安による、といわれることもあります。

子宮頸がんのワクチン問題についてもたくさんの健康被害が報告されていますが、ワクチン接種よりも心因性と考えられる、といった評価が下されることがあります。たしかに因果関係を証明することはむずかしいのですが、ワクチン接種が原因ではないという印象操作に使われているのです。

6番目の風評被害についてですが、1990年代に所沢のダイオキシン問題があったとき盛んに使われました。ニュースステーションの報道に対してほうれん草の生産農家が売れなくて怒っているということでした。ゴミ焼却場の風下の住民にアトピーや喘息の被害が報告されていたのですが、ほとんど無視されました。福島産の農産物を皆で買って応援しましょうとキャンペーンが行われるのですが、なかなか買う人がいない。復興の妨げとなる、差別を助長する、といったことにつながっていきます。どれほど微量であっても蓄積されれば健康被害になる可能性はあるにもかかわらず、そうした懸念を表明することが「風評被害だ」と攻撃されて発言が封じ込められるということが起こります。

ということで、リスク論の論法について何かご意見がありましたらどうぞ。

(上田) 今、幾つか類型化して下さったんですけども、言ってみればあなたが考えるようなリスクはちょっと大げさですよ、騒ぎすぎですよということを裏づける論法としてでてくるものがあると思いますけれど、場合によっては実際のデータを示すことがありますよね。データを示す時に、データ自身は嘘ではないんだけど、今のような類型から見るとかなり偏ったデータとか、一部しか見せていないとか、いろんな情報操作的なところが往々にしてあるということですね。そういうのを一般の人が見抜くときにどうしたらいいか。

こういう論法に沿って、相手の言っていることにこういう論法にあてはまることのできるだろうなど見ていくと、先生こう言っているけど実はこうこうこういうふうなデータも出ているし、判らない部分もあるのではないですかということで反論で見抜くということがあると思うんですけど。実際に霜田さんが言説を調べてきた中でいわゆるまっとうな反論返されて、こういう言説を組み立てている人達にとって、ある種、なんていうか考え直してみなきゃいけないといった受け止め方されたことがありますか。

(霜田) 断片的にはあると思います。山下俊一氏も一般向けに言った「グレーはシロ」論法については謝罪もしています。明らかにおかしいのではないかと、といわれると、本人も学術論文では違うことを書いているので、使い分けはよろしくないということになるでしょう。それ以外ではないですね。福島で行政や専門家がこの種の論法を使うことは多いのですが、住民がそれに批判的な反応をすることはあるようですが、残念ながらその場だけであとはつながらないという印象です。それが公開され周知されない以上、同じことが繰り返される。

(上田) 私もそういう印象を持っています。

(霜田) そこをどうすればいいかということが難しい問題です。こういう論法の具体的な発言録を並べて、それに対していちいち反論を書いて、それをウェブサイトに掲載する。もちろんこうした作業は一人ではできないので、グループで取り組む必要があります。こういう共同作業でデータベースを作成することが重要だと思います。

(吉田) やっぱり類型化も含めてマスコミにあまり出ませんよね。これはおかしいというのが出ないというのが、直接的反応じゃなくても、こういう考え方が出てこないというのがちょっとおかしい。これはマスコミの問題というのが結構大きいと思う。

(霜田) マスコミといっても組織というより、むしろ個々の記者の力量の問題ではないでしょうか。おかしな記事に対しては、あなたの記事は間違いだと攻撃するのではなくて、こういう点も知っておいてくださいと地道にアプローチするしかないでしょう。適切な記事を書いた記者には応援する、といったことも必要かもしれません。

(瀬川) 反論の方が部分的に終わってしまうのは、行政というか政府は圧倒的にリスク論の方を採用している。というか政府自身が同じことを言う。政府が出しているパンフレットみんなこれですよ。

(霜田) 文部科学省はこの種の論法を教えようとパンフレットに書いている。

(瀬川) だから政府行政の姿勢が変わらないと。

(霜田) 自民党政権であれ民主党政権であれそれほど変わらないかもしれません。

(柿原) 雑駁な言い方になりますけれど、もともとどちらかということと民主党的な人の方がリスク論に親和性が高かったのではないかとも思うのですが…。

(霜田) 菅直人元首相はいろいろ批判されてますが、他の政治家よりはるかにまじだったと思います。官僚組織はこの種の論法を駆使する側なので、政治家は無力的のように見えます。行政、学会、マスコミにもまともな人はいるでしょうが、組織・集団として動くのでなかなか変わらないということでしょうか。岡山大の津田敏秀さんは孤軍奮闘しており頑張ってもらいたいです。

(瀬川) 原発を再稼働しようとしているけど原発をどうするかという問題とはちょっと違うわけです。でもこの被曝をどうとらえるかということが、連動しちゃっているので、政府側というか原発推進側は、自分にとって都合がいいとらえ方をしてしまう。

(霜田) 放射線被曝の問題は原発再稼働にとっては重要な論点なので、とにかくたいしたことはないのだ、という情報操作が行われます。そのリスクが健康被害を引き起こすということになれば、再稼働にマイナスになるので、それを認めるわけにはいかない。

(西田) 私が素人の上にもっと素人の人にお話しをする機会が私なんかあるんですね。そうすると車の事故と原発を比べるという話はもっと上手に説明できたらいいのだと思うのですが。車の事故の問題をとりあげて上手な説明の仕方ってあるのでしょうか。

(霜田) 難しいです。車には事故のリスクがあるけれども、社会生活上多大なメリットがあることは否定できないし、やむをえないということを多くの人は認めている。しかし原発には実はメリットはないのだということを、一つ一つていねいに説明するしかないのです。原発を動かすのは利権集団の利益のためでしかない。立地地域に多額のお金が投入され、雇用を含めて依存するという構造があり、これは沖縄の米軍基地も一緒なのですが、そういうことがメリットだと思いこまされている。しかし原発は事故を起こさなくても、たくさんの労働者ががんで死んでいるし、周辺地域の住民の健康被害も多数報告があるのに、そうしたことに対するコストはまったく含まれない。

(瀬川) 自動車というのもすごい問題で、いかに交通事故で、多くの悲劇を生んでいるか。昔はあまりにもひどいから交通戦争と。今だって毎年何千人も、子どもも死んでいるので、自動車の問題は問題として、大気汚染もあるからできるだけ排気ガスをという対策も、まさに対策をお金をかけてやらなきゃいけない。まさにコストをかけて。

(霜田) 自動車事故で24時間以後の死亡は自動車事故による死者になりません。それを含めると実際はもっと多く死亡していますが、これも印象操作のひとつでしょう。

(柿原) 霜田さんがおっしゃられていたと思うんですけど、そもそも比べる対象ではないというのが大前提だと思うのですけれど。比べるということ自体がおかしいと。

(瀬川) 比べてじゃあどうかと、比べてこっちより低いからやらなくてとか。こっちより低いからほっておいてもいいという話には元々ならないですね。

(西田) リスク論の人は一律に事故率で片付けますよね。

(霜田) 比べることはたしかにおかしいですが、印象操作をねらって比べる人たちがいて、それに反論できないと通ってしまうということなのです。

(瀬川) 比べてじゃあ何、ということですよ。いろいろ世の中リスクがあって、高いもの低いものあったとして、じゃあ低いものは何もしなくて高いものだけ対処すればいいと考えているのですか。

(霜田) 考えている人もいますでしょう。それはそれなりの説得力を持つわけです。

(瀬川) そうすると昔のやつは独身が一番リスクが高いというのがありましたけど。今、少子化問題とかね、他をおいてもそれをやれといったら、戦争法案とか審議している場合ではないでしょうという話にもなるとかね。

(霜田) それはフレーミングすなわち枠組設定ということで、それを決める力に対抗するのは容易ではありません。一旦作られたフレームというのはそれ自体力をもってしまうので、フレーム自体がおかしいといっても相手にされない。だからフレームはおかしいということは言い続けたいいけないし、フレームの内部でおかしなことがまかり通ることにも対抗しないといけない。つまり二重の戦略が要求される。しかしすでにできてしまったフレームを前提として世の中は動いていく。

(S氏) もと、教師だったのでですけど、実は私、少しはリスクについて勉強した。中西さんの本も3



冊読んで、専門書というか、あるものをきちっとデータしたすごい分厚い本もかってに読んで、全部読めなくて、その時僕は、そのまま受け取りました。リスクとベネフィットのことは考えなくてはいけないだとそのまま受け取りました。どっかで生徒に話す時に、それを話そうと思っていました。で今回、このデータを頂いて読んだら、えーすごいなと実は思ったのです。全部僕が、実は中西さんをよんで なんか変だなと実は思っていたのです。この人言っていること違う。あの人やっていることはせいぜい下水道のことは、あの人はやりました。その程度のことでは中西さんのこと言っていることはそうかもしれないけれど、それ以外のところでなんか違うなと思いながらそれ読み続けていたのです。その中で自分の中に蓄えていたのです。ところが今回これを読んで全然違うなと思ったときに、ぼくがそのことを子供たちに発言しなくてよかったなと思ったのです。で、話はすっと飛びますけれど、こういうものが教える側の人間に届くようなシステムってどうしたらいいのかなと。こういうことが読んだときにああリスクについての考え方にマイナス面がいろいろあって、きちっと捉えた上でリスクについて子供たちに語るという方法をとらないとたまたま読んだ本が、自分が手にした本がそのまま自分の蓄えになってしまう。そこが実はそういうことを僕はずっとやってきたんだろうと思っているのです。実は思っているのです。中川さんのことについても、河出書房新社で低線量被曝の何とかという厚い本ですけど それを読んだときに、心理的なストレスの問題がでてきて、そうかもしれないなと実は思っていたのです。きちっとこうやって伝えてくれる人が近くにいたりとか、どっかにアクセスするとそのことが少なくともわかるものがあると世の中に明確にあると、ああ自分でもう一回考えなおすとどっかにアクセスすると…これは本当にありがたかったのです。

(霜田) 先ほど申し上げたように、この研究会のウェブサイトにはリスク論に関する具体的な発言録を掲載して、その問題点を個々に指摘するということをしてはいかがでしょうか。ウェブ上には山下俊一語録や中川恵一語録がありますが、できるだけ網羅的に記載するのが有効です。本を読んでだまされかけた人も気がつくかもしれません。

(吉田) さっき、自動車事故の話だったのですけれど、自動車事故を放射能の事故と比べる場合もありますよね。チェルノブイリの後、その話が、日本でも朝まで生テレビとかよくやってましたけど、原発をなくせというのは一つある。それももちろん放射能のことがベースにはあるわけですがけれども。放射能の被害を自動車事故で死ぬ人と比べるとみたいな。

(上田) こういう言説を反論していく時にね、非常にやっかいだなと思うのは、なんというのでしょうかね、その言説が意味するところの土台といいますか、あるいはメタレベルとか見たときに、どういう前提を持って話を見据えないと有効な反論ができないと、どうもありそうな気がするんですね。一般人はたぶん自動車の例が自動車の被害とかなんとなく新聞記事とかニュースで見聞きしていると。原発についてはそんなに詳しくは知らない、けどもいろいろな事故が起こったと危ないということもわかるわけ。けど具体的な数字が導かれているのをよくは知らない。すると専門家が例えば自動車事故で年間何千にも死んでますよ、一方原発で死んだ人はたかだかこれくらいですよ、みたいな話をされると、ああやっぱり数字はこっちのほうが多いのだからこっちのほうが危ないと思うべきなんだろうかなという方にひきずられるわけですよ。今、おっしゃたようにフレーミングが違うし、そもそも比較できないものを無理やり比較している部分もあるし、そういう分析フレームを作ることというのはどうい

うやり方をしているのかとか、それからなんていうのでしょうかね。比較しておかしいものはなぜおかしいのかあたりのより土台となる議論がある。その部分を見やすくするのがどうしてもいるのかなと思っているのでしてね。そこは本当に、それこそ哲学・論理学で鍛えている人に助けを借りて整理しないと無理なのかなという面もありますし、あるいはもっと身近な例にひきつけて、なにかこう比喩的に見えるようにしていくという手法もあると思うのです。

誰かが言っていた例なのですけれど、福島で事故が起こってセシウムが降ってきたと、セシウムを測ってみたらたいしたことないとか一方であるとしましょう。たいしたことないでしょう的な議論をする人がいると。でも、例えばあなたが道を歩いている時にいきなり水をぶっかけられましたと。水をぶっかけられて、何するんだよお前、と言ったときに、いやいやあなた風邪は引きませんからと言われたときにどう思いますかという話があるわけですよ。そんなことは納得しませんよという話になりますよね。そうすると人はどこで納得するのかというそのレベルにちゃんと落としこんでおかしいということを示す、何かそういう行動がないとなかなか理解してもらえないというところがあるのですよね。だから相当やり方を工夫がいるなという意味も一方ではしています。

(霜田) ご指摘の通りですが、例示というのは慎重にしないといけないと思います。それはそもそも比較対象ではない、という反論が出てくるからです。もちろんわかりやすくするために必要な場合もあるでしょうが、一般化・抽象化するというのも重要で、それらを組み合わせて説明することが求められます。

(瀬川) ちょっとリスクについて、国際放射線防護委員会、ICRP をこの間調べたのですが、中川保雄さんの『放射線被曝の歴史』だと、もう50年代からICRPはリスク受忍論なのですよね。要するに核実験の放射能を世界中にばら撒いたものをいかに全人類に受忍させるのか。ところが、ICRPがICRPになったときから始めているから、リスク研究はなにせ年季が入っていて世界的な動きの中でやっているからなかなかたいへんかなという。

(霜田) IAEA(国際原子力機関)や国連の科学委員会ははっきりとしたスタンスがあります。WHOもしばしばそれに組み込まれている。国際的な原子力マフィアの強大な力は日本の原子力ムラなどとは比較にならないほどのパワーを持っています。

(吉田) 向こうは強大で、こっちは…

(西田) ちょっと質問なんですけれど、リスクとおっしゃるのですが、リスクではなくてこの原発事故の場合はむしろ犠牲という言葉を使ったほうがいいのではないかと。リスク論の土俵の中に入ってしまうとそれだけで相手のフレームで話がそうなる。

(霜田) リスクと関連してハザードという言葉が使われることがあります。被害・害悪です。犠牲というのはその人が理不尽な被害を受けたという特定の文脈のなかで使われる言葉です。原発の場合、事故が起こって、被曝して甲状腺がんになった子供たちは犠牲者です。しかしスクリーニング効果だという主張では、犠牲者ではなく、たんに運が悪い人ということになります。つまり犠牲というためには、それが原発事故による放射線被曝が引き起したということを示さないといけないのですが、それはとても

むずかしい。それがリスク論の水準です。

(西田) 証明するためには50年20年30年という時間が必要なのでしょうか。

(霜田) おそらくいくら時間が経過してもむずかしいと思います。だから水俣と同じことが繰り返されるのです。今やるべきことをやっておかないといけません。

(瀬川) 原田さんが亡くなる前に福島は水俣よりたいへんだ。水俣はまだ因果関係がある程度見えるのに、福島はもっとたいへんでしょうね。て言って。

(霜田) ここでそれぞれの論法に対する批判的検証についてまとめておきます。先ほども触れましたが、いったん権威ある者たちによるフレーミングが提示されると、それを覆すのは至難の業です。その土俵に乗ってしまうと、すでに結論が出ているということがある。だからそれに乗るべきではない、しかしそれをきちんと批判しないとまかり通ってしまうというディレンマが起こる。それでも科学とは、わからないことはわからないというのが原則であり、わからないことは無視していい、などというのは科学ではなく政治なのだ、ということは強調しておかないといけません。因果関係がわからないのならそれを慎重に解明していく必要がある。水俣のときもチッソ工場の排水が原因ではないかと指摘され、健康被害が多発しているのだからいったん止めて原因究明すべきではないかという意見はあったが、そうならなかった。リスクとベネフィット・コストについては、例えば発電コストを比較しただけでは問題は見えないにもかかわらず、そうした恣意的なフレーミングが幅をきかせるわけです。社会的コストも考慮すべきだということ、それは感情論だと攻撃される。あるいはウランの採掘や定期点検における労働者の被曝による健康被害はコストに入らない。リスク・コミュニケーション、ゼロリスク要求、風評被害といったことも、結局のところ情報操作の手口の変容にすぎないことがわかります。一つ論点を上げると、安全とはいえなくなったので、安心してもらいさえすればいい、というように、「安心神話」へとスライドしていく。一つひとついいにその手口を暴いていく作業が必要となります。

最後にまとめとして、社会的リスクや道徳的リスクについて触れておきます。リスクというのは定量化可能なデータを扱うものであり、社会的リスクや道徳的リスクなど恣意的にすぎない、という反応が返ってくるでしょう。モラルハザードについても言及しました。他人がどこかでがんになろうと死んでいようと自分には関係ない、という心の退廃です。「構造的無責任」という表現で今起きていることを整理しました。そこからいかにして脱却するのか、ということが問われているというのが私の問題提起です。

(上田) どうもありがとうございます。霜田さんの今のお話についていくつかあれば。

(柿原) ちょっとお伺いしたいのですが、最初のほうでリスク論言説のまとめでお話になった時に、イデオロギー批判をされたのですけれど、「イデオロギーの危うさ」とあったのですが、どういうニュアンスなのか、補足していただけますでしょうか。

(霜田) 原発再稼働や放射線被曝リスクの過小評価を構造的無責任として捉えるという視点を提示したのですが、それは同時にイデオロギーあるいは思想的立場の対立構図を形づくるということです。原発

をエネルギー源としてどう位置づけるか、再生可能エネルギーにシフトするべきなのかということも含めて、政治的な争点と見た場合、リスク論言説の側は一方の側に加担しかつ無責任な構造を延命させようとしているという批判はイデオロギー批判といえます。しかしこうした構図は、リスク論をめぐる議論にとってはマイナスになる可能性もある。あなたは反原発という特定の立場からリスク論の言説分析をしているだけでしょ、という評価がされる可能性がある。論点それぞれの妥当性を一つ一つ検証する必要があるのだということを理解してもらう必要がある。

(吉田) それはよく言われますね。反原発だからこう言っているという言われ方はすごく多いですね。

(霜田) そうです。

(西田) もう市民相手に、あなた反対の立場でしょうで終わりにしてしまうと。

(吉田) 原発を止めたいがために放射能のリスクを過大に言っているみたいなのという感じですね。

(霜田) そういう恣意的なフレーミングに対しては、両者は別問題として考えることは可能であり、リスクについては原発の是非とは切り離して議論できる部分があり、それは科学的でありかつ政策的問いでもあることは強調していいと思います。

(瀬川) 原発反対だからそう言うのでしょって言う人に対して、そういうあなたは推進ですね。そういうあなたは推進なんですね。そういう立場なのですね。それは私は推進なのですよという人もいるかもしれないけど。

(霜田) 今の段階ではいるかもしれませんが。すぐには廃止できない、当面は必要ではないか、という立場です。

(瀬川) いずれ廃止という点ではある程度は一致しているわけですから。今の自民党政権だって長期的には減らすといっているわけだから。

(霜田) それはおそらく真意ではないでしょう。電力会社も作るといってます。

(瀬川) 政権の中でも同じ党の中でも、やっぱり減らしていこうとか、再稼動するかどうかは切り離してリスクの問題については可能性はあるという話。同じ党の中では減らしていきましょうと一応言っているのだ。選挙の上ではどうか、そこは逆に議論が分かれちゃうのではなくて、議論の出発点にはなりますかね。

(霜田) 原発をどうするかということとは切り離して放射線被曝リスクの問題は考えていかねばならないと思います。

(柿原) 言説批判をするときに、ある立場が前提となっているのかなっていないのか、たぶん何らかの立場がそれぞれの論者にあるのは致し方ないでしょう。そのことに対して、自己言及的あるいは反射的に考えることができているかどうか。例えば霜田さんがこういうふうにはリスク論への批判をされて、そこでのいろいろなポイントが、それを批判している側自身にどれくらいあてはまっているか当てはまっ

ていないのかという吟味をすることが大事なのではないかと思います。でもたいてい批判された側は、そうした吟味をしないで、立場が違うのですね、で終わっちゃうわけですね。こういうことをもう一段階積み重ねるといってことで一歩進むのではないかと。

(霜田) 最初の一段階は、リスクについての特定の言説があり、そのポイントをまとめて、それに対して批判的に検証するという作業です。それに対する反論が提出され、その妥当性を検証するというのが第二段階でしょう。そこでその言説が正当化はできないということで一定の合意が成立すれば、立場は異なっても共通了解とすることができます。

(上田) リスクを巡る対立構造があるとき、手続きの上で、市民が参加しながら専門家と議論、言ってみれば熟議していく、そういうことを正式な、学校や国も関与したところで組織的にやっていくことで、いままでのリスク論が陥ってしまう事柄を乗り越えていくことができるというふうに考えていいわけですか。

(霜田) ここで取り上げた手続き主義というのは、要するに手続きが重要であって、それによってどういう結果が出てくるかはとりあえず問わないというもので、哲学のひとつの流れです。手続きの非常に細かい形式とか条件を定めて、それに合致するような形で結論に至るプロセスを明確にする。コンセンサス会議などはその具体化といえるのですが、そこでは遺伝子組み換え食品や放射線リスクの問題が取り上げられています。そうした社会的な意思決定プロセスが実際の政策決定に影響を与えるにはまだまだ時間がかかるかもしれません。ヨーロッパ各国ではそれを制度的に取り入れているところもありますが、日本の官僚機構や利権政治からなる強固な権力構造を崩すのは容易ではありません。

(吉田) 日本だと官僚機構がやっぱりすごい強いですよ。でそれが専門家も自分に都合がいい専門家を連れてくるわけだし。今までは味方だったけど小佐古さんみたいにちょっと反論したら、もう後は使わないみたいな形で。政治家もちろんそうなんだけれども、官僚機構の強大さをどうやったらあれを崩すというか、ちょっとでも変えられるのだろうかというのを思うのですけれど。

(霜田) 本当に強固です。今おっしゃったように、たいていの審議会や専門家会議を仕切るのは官僚であり、それと結びついた学者や文化人が多数を占める。議長になる人間は最終的に終結させる権限がありますから、官僚にとって都合のいい人が選ばれるのが通例でしょう。原子力業界はその典型ですが、産業界や学者たちが利権集団を形成し、官僚や政治家たちが動かしていく。結局のところ、官僚の力というのは名前のある学者を呼んできて専門家会議を開いて、かたちを作ることができるかどうかにかかっている。そういう仕組みを変えることはむずかしいですね。

(上田) 理屈的に言えば、官僚からも政治家からも独立したその技術評価の専門家機関を設けるべきなんです。そこに委託しないと科学技術に関する政策は裏づけされないよという手続きを組み込んでおくことですね。そこまでできたらある程度変わると私は思っているのですけれど。ただしその、技術評価機関が、どういう専門家で固めるかという話になってくると、やはり多様な専門的には誰も認知するような能力の高い人なんだけれども立場が違うとか意見が違うとか、多様にとりいれてということが前提になるでしょうね。

誰が見ても独立性がありかつ多様だということが認定できるような機関を作ってそこが実行力を持つということですね。政策的に。そういう仕組みを作るしかないと思ふ解はないと思ひますね。

テクノロジーアセスメントとはそういう発想で、ヨーロッパではそういうこと。実際ドイツでは内閣あるいは議会が諮問委員会作ってほんとに多様な人が集まって結論が違ふことがあるんですけど、独立性がほんとに高いですね。やはり賛成反対それぞれの立場の人がいるんですけど、それは徹底的に議論するということが前提で作られていますから、そういう形を日本でもできなくはないと思ひますが、総合科学技術会議というのが一応はあるですね。生命倫理に関しては調査会、専門調査会というのがあると。これもやっぱり官僚が選んでしまいますから、そういうやり方は手続き主義というのはいまそこに、そういうやり方をしてはいけないう批判的な力になりうる考え方なのです。

独立して、もうそういうのがちゃんとやっけてない意味では、今おっしゃられたように、独立していなかつ、偏っていたらもっとたちが悪い。学術会議みたくのところはあるは、意味では第3者的。でもやっぱり部会によっては固められちゃっていますよね。

(霜田) 学会のある種の支配構造、利権と結びついた集団が牛耳るというのは避けられないうと思ひます。異なる意見をきちんと認定した上で、それぞれの立場の人を呼ぶということがどこまでできるかがポイントです。

(瀬川) ハードルが高いですかね。学会でそういうことをやること。

(霜田) 医学系はとくに学会政治が横行しているのではないのでしょうか。

(瀬川) 放射線も医学系の一部ですからね。官僚もあるけど学会の問題もあるということだよ。

(上田) 話は尽きないんですけど。ここで一旦締めたうと思ひます。